Osaka University Knowledge Archive

Title	ヘレニズム時代における信仰とポリス社会 : サラピス崇拝の伝播と受容を中心に
Author(s)	中尾, 恭三
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58544
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【10】

氏　　名	中　尾　恭　三（なかお きょうぞう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４２８０　号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	ヘレニズム時代における信仰とポリス社会―サラピス崇拝の伝播と受容を中心に―
論　文　審　査　委　員	（主査） 准教授　栗原　麻子 （副査） 教　授　江川　　温　　教　授　内田　次信 立命館大学特任教授　大戸　千之

論文内容の要旨

中尾恭三提出学位論文「ヘレニズム時代における信仰とポリス社会―サラピス崇拝の伝播と受容を中心に―」は、サラピス崇拝の伝播と受容を、信仰を担った結社とポリス社会との関係性のもとに捉えようとするものである。「序論」と第１－４章、「結論」、「補論」によって、ヘレニズム期に顕著となる外来祭祀の伝播と受容が、旧来のギリシア社会においては人々の「伝統的ふるまい」にもとづいて理解されうることが論じられている。

「序論」でヘレニズム政治・経済・宗教史の研究動向を概観したのち、第１章「ヘレニズム時代前期アテナイの儀礼結社と国際関係」では、比較的史料状況に恵まれているアテナイをピン・ポイントで取りあげることによって、外来祭祀がポリス社会の国際的・通商上の紐帯形成のためのツールとして機能していた可能性が示される。外来祭祀の伝播と受容を、結社による国際的な人的交流と、当該社会において外来祭祀が果たしていた機能の二側面から検討しようとする本論文の基本的論点が提示されており、論文全体の第２序論となっている。

第２章以降においては、いよいよサラピス祭儀に対象を絞り、ヘレニズム期のギリシア世界における、その伝播と受容の形態が論ぜられる。まず第２章「サラピス崇拝のデロス島への伝播と受容」においては、サラピス祭儀の中心地となったデロスについて検討が加えられる。デロス島における同祭儀の受容に関しては、縁起譚その他の資料によって国家祭儀化の過程を辿ることが可能である。その結果、デロスにおけるサラピス祭儀は、私的結社に始まり、のちに国家祭儀化したこと、国家祭儀化以降も私的結社は存続し、デロス島を支配したアテナイ人やローマ人による商業的ネットワーク形成に貢献していたことが論証された。

第３章「ギリシア各地のサラピス崇拝とその役割」においては、デロスとの密接な関連のもとにサラピス祭祀が受容されたアテナイおよびデロス島周辺の諸ポリスにおける受容の実態を、断片的な史料からできるかぎり解明している。また、デロスやアテナイにおいては商人による結社受容が先行したのにたいして、デロスとは異なり国家主導で導入が進められたクレタや、結社が国家防衛のために組織化されていったロドスの事例を取りあげることにより、祭祀受容の個別性を踏まえたうえで、国内的・国際的なネットワーク形成における祭祀のはたらきが確認されている。第４章「前２世紀カイロネイアにおける奴隷解放とサラピス」においては、サラピスが奴隷解放の証人として国制に取りこまれていたカイロネイアの事例が扱われる。これらを受け、「結論」ではヘレニズム期における信仰の保守性がふたたび強調されることとなっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、いわゆるヘレニズムの旧世界における外来祭祀のネットワーク形成機能を、サラピス祭祀にかんする碑文史料を徹底的に猟歩することによって明らかにしたものである。その意義は、次の２点に集約される。まず第１に、伝播・受容の過程をたどることによって、サラピス信仰の伝播がプトレマイオス朝の宗教政策であったか否かを巡る論争に終止符を打ったこと。すなわちロドスのように受容が直接的な政治力学の反映とみなされるケースと並んで、デロス島を中心とする地域における伝播は、より長期的・私的な地域的経済活動の影響を示していることが示された。第２に、サラピス祭祀は市民あるいは外国人の結社における紐帯強化に寄与するとともに、それぞれの受容主体における社会システムのなかにとりこまれていったことが、祭祀の公認・国家祭儀化、国際競技会の開催や奴隷解放等によって例示された。個々の碑文にたいする個別具体的かつ詳細な分析を通じて、ヘレニズム期におけるサラピス崇拝の受容過程を浮き彫りにしたことは高く評価されるべきである。

もとより、史料上の制約を勘案しても、なお本論文にはいくつかの欠点が伴っている。第１

に、サラピスがヘレニズムを代表する神格であると考えられている以上、サラピス信仰の内面的性格の有無や祭祀行為の特質といった伝統的問題にたいしても目配りが必要であった。

第２に空間的・時間的な考察範囲についても疑問が残る。祭祀の伝播・受容という観点からみたときに、ヘレニズムの旧ギリシア世界という枠組が正当であるのかどうか、十分に論じきれなかった。

第３に、私的祭祀と国家による公認・国家祭祀の定義が不明瞭であるなど、論文構成上の技術的な問題が論旨の明瞭さを損なっていることも否めない。

しかしながら、サラピス崇拝の受容を社会・経済的なネットワーク形成から把握しようとする視点は、結社研究の現状からみて妥当かつ先進的である。ギリシア世界としての一般性を端的に示し得なかったことは本論文の欠点ともみなしうるが、サラピス崇拝についての網羅的検討の代償として受け止めるべきものであり、断片的な碑文史料から個々の政治共同体における祭祀受容の文脈を掘りおこした成果は評価される。祭祀がヘレニズムにおける人的交流と交流圏の形成を跡づけるための切り口として有効であることは明らかであり、うえにあげた限界についても、今後，サラピス崇拝にとどまらず多様な宗教的慣習を検討するなかで解消されることが期待される。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものとして認定する。